

第二話 ばんしゅうさらやしき 播州皿屋敷

絵金で読む
絵金を読む

「いちまい…にまい…」
夏の怪談の代表格ともいえるお菊さんの「皿屋敷伝説」。

お皿の紛失を理由に殺されたお菊さんが、放り込まれた井戸から恨めしげにお皿を数えるというこのお話は、各地の伝説として残っています。また、浄瑠璃や歌舞伎でも人気の怪談としていち早く劇化されてきました。舞台、ストーリーともいくつかのバリエーションがありますが、もとを辿れば舞台は播州姫路。代表的なものに「播州皿屋敷」(1741年)があります。現在では、江戸の番町を舞台にして書き替えた、岡本綺堂作の「番町皿屋敷」(大正5年)が親しまれています。

播州姫路で
お家乗っ取りをたくらむ
鉄山一味。



その悪計を
忠臣船瀬三平の妻・お菊に
聞かれてしまう。

お菊の預かる家宝の皿。
かねてからお菊に恋慕していた
鉄山はその一枚を隠し…



その罪を着せ
お菊のに言い寄るが
受け入れられず



そのままお菊を責め殺す。

幽霊となったお菊は、
毎晩毎晩
鉄山を苦しめる。

ついに滅ぶ、鉄山一味。
夫・三平は敵の首を取り、
お菊に差し出すのだった…



一枚の絵に、
見える展開。

絵金の得意技、それは、一枚の絵にストーリーの展開を見せる、という仕掛け。一見、ある一つの場面の描写に見えるこの絵。あたかも背景のように描かれて



いる庭の部分には、実は絵の中央に描かれた三人のその顛末が描かれている。場面ではなく、あくまで「物語り」を描き込む絵金らしい手法といえる。

遊びどころ、

「隠し絵」。



おどろおどろで知られる絵金の、意外と知られざる「遊びどころ」。絵金はしばしば、画中に「隠し絵」を入れる。それは、時には物語りを読む手がかりとして、時には人間の本質を突く痛烈な皮肉として描かれ、芝居絵の魅力に奥行きを持たせている。

「播州皿屋敷」で描かれた家紋、よく見るとそこには男女の姿が隠されている。こうした隠し絵を見つけて「読む」ことで、一層面白さが増すのである。

あかおカルタで町歩きスタートにつき

「あかおカルタ」 誕生秘話

くまるとまわる
フランススコッキ
みたいだな

8月6日、赤岡の町を自分で歩いて楽しんでもらおうという仕掛け、絵金蔵発「あかおカルタで町歩き」がスタートする。そこで、そもそも「あかおカルタってなに？」という人のために、その誕生秘話をご紹介します。

始まりは
「赤岡探偵団」

遡ること8年前、赤岡に「赤岡探偵団」なるものが結成された。路上観察学会の赤瀬川原平さんをはじめ、各界の大御所たち5名を団長に、団員の住民たちが集まって探し始めたもの、それはなんと「町の不思議」。

町のどこに隠されているのかを、ラムネ片手に探し始めた。近所のおじさんに、おばさんに尋ねながら、一つ一つ探し当てて行くと、普段見慣れているはずのこの町にこんな不思議が隠されていたのかと驚いた。

探し当てた「不思議」には、ここに、はい一句。ここに「あかおカルタ」誕生。

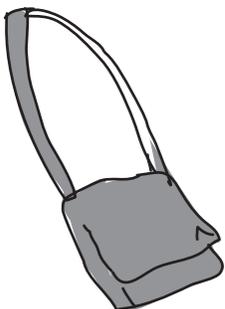
絵金蔵、発。

ちよつと目線を変えただけで変わる「モノの価値」。絵金の絵だけではなく絵金の文化までを守り伝えていきたいという絵金蔵の完成は、「モノの価値」をお客様と一緒に考えていきたいというその始まり。そして8月、次のステージのスタートです！

あかおカルタ誕生！

町の「不思議」を切り取った写真の数々。それが、二年後に結成された「親子赤岡探偵団」に渡された手がかりだった。残された写真を手がかりに、子どもたちは二年前赤岡探偵団が見つけた不思議が

あかおカルタで町歩き 8月6日



参加方法：絵金蔵受付にて参加受付。受付表に名前を記入し、町歩きセット一式が入ったカバンをお受け取りください。
※荷物預りあり(無料)
受付時間：午前9時～午後3時半(絵金蔵開館中)
※4時半までに絵金蔵までお戻り下さい。
参加料：300円(ラムネ代込み)
お問い合わせ：絵金蔵(0887-577-117)
※団体の場合は要予約